

望月政司先生のご逝去を悼んで

北海道大学名誉教授
小山 富康

日本生理学会特別会員・望月政司先生（山形大学名誉教授）は平成26年10月24日、92歳にて逝去されました。望月先生は大正11年3月に静岡市に生まれ、昭和20年北海道帝国大学医学部をご卒業後、同大学医学部助手ならびに北海道大学電子科学研究所の前身である超短波研究所助手になりました。昭和27年には応用電気研究所助教授、昭和28年から32年までドイツGöttingen大学へ留学、帰国後応用電気研究所所長になりました。昭和48年からは新設医学部の基礎作りに請われて山形大学医学部へ転出し、一貫して呼吸生理学を専門とした教育研究に励まれました。昭和62年に山形大学を定年退職、退職後は札幌の西岡山病院老人呼吸生理センター長を務められ、生涯に亘って呼吸生理学の研究を続けてこられました。

望月先生は昭和26年、当時応用電気研究所所長であった箕島高先生とともに、世界に先駆けて白金電極法による生体酸素濃度記録装置（Oxigraph）を開発されました。留学先のGöttingen大学に装置を持ち込み、Bartels博士と赤血球内酸素拡散速度の実験的・理論的研究に精力的に取り組みました。後にこの白金を用いた酸素電極はClark博士によって改良されClark電極として酸素分圧計測に用いられるようになったのは周知のとおりです。望月先生は生物顕微分光比色装置やグロー放電を用いた呼気ガス分析装置も開発され、赤血球内Bohr効果の反応時間の計測、肺の酸素拡散能の測定、肺における赤血球の接触時間の推定法、肺血流量の無侵襲計測法の確立など、呼吸生理学上の未解決問題を解く知見を次々と発信し、国際的にも高く評価されました。とくに昭和51年、当時助教授の田澤皓先生と共同で、



卵の絨毛尿膜毛細血管内を流れる赤血球1個でBohr効果の反応速度を計測した研究はNatureに掲載され、この分野の研究に大きなインパクトを与えました。その研究スタイルは理論的かつ緻密であり、自分に対しても教室員に対しても厳しい先生でした。実験に必要な装置は自ら旋盤を回して作製し、実験データの取得から論文執筆までご自分で行いました。血液中の酸素、炭酸ガス濃度を測定するために実験室でVan Slyke装置を自ら振る姿は今でも目に焼き付いています。また、夏場になると当時冷房が効いていない居室のドアを開け放し、部屋から論文を執筆しているタイプライターの音が廊下中に響き渡っていました。さらに先生は早くから電子計算機の有用性に着目し、赤血球内酸素、炭酸ガス、重炭酸イオンの同時拡散に関する連立偏微分方程式の計算機解法に取り

組み、呼吸生理学分野におけるコンピュータシミュレーションの先駆けとなる業績を残しました。その成果は定年退官後、これまで発表された論文集といっしょに「Overall gas exchange through red blood cells」に集大成として纏められています。今、この600頁にわたる本を手に取り、改めて preface を読んでみますと、研究に対する情熱をひしひしと感じとることが出来ます。

山形大学に転任されてから先生は教育にも熱心に取り組まれました。生理学第1講座を担当され、生理学の教育、研究と後進の育成に多大の功績をあげられました。講義ではドイツ語の生理学教科書から要点を抽出し、理解しておくべきことを分かり易く箇条書きにして小冊子に纏め学生に配布していました。今では講義を担当する者にとってシラバス作成は当たり前の作業になっていますが、学生の理解度に配慮して授業計画を立てていた先生らしさが伺えます。山形大学を退官された後も年に数回米沢市にある三友堂病院看護専門学校で医学概論の講義を担当し、その講義メモを纏めた小冊子が「終わりのない講義」というタイトルで残されています。その中には、自然の摂理、生の喜び、学問の喜び、医の道など先生の哲学的な思考が綴られています。

先生は大学運営にも積極的に関わられ、北海道大学では応用電気研究所所長、山形大学では山形大学医学部長や山形大学評議員を歴任されました。また電子計算機にも造詣が深かったことから分散キャンパスである山形大学全体の情報処理センター設置に貢献されました。今では学術情報基盤センターと名称を改め、学生教職員の教育研究になくてはならない設備となっています。

学会活動としては永く日本生理学会の評議員、幹事、編集委員を勤められ、また日本生理学会史に関する上下二巻からなる大冊を編纂されました。昭和61年に日本生理学会大会の大会長を務められ、また昭和62年には酸素輸送に関する国際会議 (ISOTT) を札幌で開催されました。そのほか日本 ME 学会 (現日本生体医工学会) の創立委員、日本胸部疾患学会理事などを歴任され、多くの学会に足跡を残されました。平成8年11月に

は、勲二等瑞宝章を受章され、札幌で開催された祝賀会では先生から薫陶を受けた多くの仲間が集まりました。奥様とともにこやかな笑顔を見せていたのをつい先日のように思い出されます。晩年は西円山病院の患者さんの血液データを収集し、酸塩基平衡に関する理論的な解析をされました。望月先生としてはもう少しデータ解析を続けたかったのかもしれませんが、呼吸生理学者として生涯新しい知見を求めて走り続けた望月先生は、我々に真の研究者の姿とは何かを教えているような気がします。先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。合掌

望月政司先生の略歴

大正 11 年 3 月 3 日	静岡市に生まれる
昭和 20 年 9 月	北海道帝国大学医学部卒業
昭和 20 年 12 月	北海道帝国大学文部教官 手医学部兼超短波研究所
昭和 21 年 3 月	官制改正により北海道大学 文部教官応用電気研究所
昭和 27 年 4 月	北海道大学助教授応用電気 研究所
昭和 28 年 8 月	西ドイツ Göttingen 大学 へ留学
昭和 32 年 10 月	西ドイツから帰国
昭和 33 年 10 月	北海道大学教授応用電気 研究所
昭和 36 年 3 月	米国ペンシルバニア大学 生理学教室客員研究員
昭和 45 年 4 月	北海道大学応用電気研究 所所長
昭和 45 年 4 月	北海道大学評議員
昭和 48 年 11 月	山形大学医学部へ配置換え
昭和 54 年 4 月	山形大学医学部長
昭和 54 年 4 月	山形大学評議員
昭和 61 年 4 月	日本生理学会大会長
昭和 62 年 3 月	山形大学定年退官
昭和 62 年 4 月	山形大学名誉教授
昭和 62 年 4 月	溪仁会西円山病院老人呼 吸研究センター所長
昭和 62 年 8 月	生体の酸素輸送に関する

平成7年4月

国際学会（ISOTT）会長
日本生理学会特別会員

平成8年11月

平成26年10月24日

勲二等瑞宝章受賞

逝去（92歳）